

ポラリスを仰ぐ北の大地から



銚井直作展とコロナ

空知医師会 会長 かみぐちけん じろう 上口権二郎

昨日、洋画家 銚井直作先生の展覧会の最終日に鑑賞に行きました。私が初めて銚井先生とお会いしたのは十数年前でした。当時の空知医師会長であられた故小泉冽先生に可愛がられ、時々飲み連れて行っていただいていたのですが、そこでご紹介いただきました。明るく気さくな先生です。美術館巡りが趣味であることをお伝えすると、すぐに、やってみよう！と言われ、そのまま月1回のレッスンを始めました。ド素人が始めた油彩はとても難しく思ったように描けないのですが、いつも褒めて下さる温かい人です。褒められすぎてついつい私も個展を開いたことがあります。

さて、会場に入り驚きました。普段の展覧会とは全く違っていたのです。風景や花などをモチーフにした抽象画に近い美しい油彩の作品のはずが、パリのポンピドゥーセンター（フランス国立近代美術館）に来てしまったような錯覚に陥りました。正面の100号の作品には、不規則に白黒に塗られた軍手がキャンバスの中に大量に貼り付けられており、それらが一斉に中心に向かい貴重で僅かしかない何かを必死に奪い合おうとしているのです。強力な負のエネルギーを感じ、恐ろしい気持ちになりました。俺によこせ！ そんな声が聞こえてきそうです。この作品と対をなす位置の作品では、やはりたくさんの手が今度は長方形の黒い枠の中から安全な地を求め必死に逃げ出して行こうとしている作品でした。なんとかしてあげたい気持ちになりました。銚井先生にお聞きすると、これらの作品はコロナ禍に描いた作品でコロナによる世界の混乱の一部を表現したとのことでした。当時の凶悪なコロナによるたくさん犠牲者の声が聞こえてくるかのようです。他にもコロナによる世界の分断を表現したものやいつも通りの美しい景色や迫力のあるフルーツの絵など大変楽しめた展覧会でした。



暑かったこの夏

芦別市医師会 会長 はしもと ひであき 橋本 英明

コロナ禍明けの、この夏、念願の富士山に登頂した。2013年に世界文化遺産に登録されたこともあり、世界的に脚光を浴びる一方で、環境保全や登山道の大渋滞など問題も多い。妻の里帰りも兼ねて山中湖畔（標高1,000m）で高地順応し、河口湖で友人と合流した。入山はマイカー規制のため電気自動車で移動した。午前3時に富士スバルラインが開門し、五合目に無事到着。オレンジ色に染まる空と山中湖の輝く湖面から江の島を望む景観を眺めながら出発した。学生時代にテニス合宿で訪れた山中湖で、初めて富士山を拝んでから、登頂はかねてからの願望だった。自分の身体に何らかの不安が生じ、己の限界を試したい。そんな年齢に達した仲間と共に、七合目から本八合目の660m、3時間の長い岩場斜面を牛歩戦術で攻めた。「高山病に酸素あります」の看板を横目に、互いに励ましあい何とかクリアした。そこからは、頂上を見ながらのラストスパート。言わずもがな力が湧いてきた。ついに富士山頂上浅間大社奥宮（3,715m）に到着した。歓喜にわく山頂には国籍を問わず、老若男女の笑顔、笑顔。一杯のカレーうどんも最高だった。決行日が、偶然にも梅雨明けで快晴であったこと（因みに翌々日は山頂で積雪あり）が奇跡的であった。

今年は、処暑の候にもかかわらず酷暑が続いている。地球温暖化の上、ラニーニャ現象の長期化で、温暖な太平洋高気圧の張り出しが長引いているためらしい。熱中症で道内の小学生が亡くなる報道もあり、暑さによる休校が多いのも非常に珍しい。外来ではCOVID-19、熱中症患者さんの受診が多い。アルプススタンドが、異様な熱気に包まれ、慶應高校の107年ぶりの優勝で幕を閉じた熱い甲子園もまた一興。当院の2階に形成された巨大なスズメバチの巣が駆除されたことで、ひと夏の終焉を感じる今日この頃である。